
吸血鬼の作法

雨宮歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の作法

【コード】

N6006X

【作者名】

雨宮歩

【あらすじ】

山奥の少し開けた土地に暮らす康太と智絵。平凡な高校生である彼らが出くわした存在し得ない存在とは。

平凡な日常

とある日の放課後。学生は帰宅し閑散とし西日がさしてオレンジ色に染まった教室の中。俺はその日の日直としての仕事を終え、帰宅しようとカバンをつかんで一年B組の教室をでて昇降口へ向かった。とそこへ部活を終えたらしい我が幼馴染が走ってきた。

「こーちゃん。日直も終わりでしょ？一緒に帰ろっ」

といいながら横にぴったりついてきたのは大川智絵おおかわちえ。なんとも自己主張の少ない胸。きれいなアーモンド形の瞳。肩の長さで揃えてある茶色い髪。さつきも言ったが幼馴染だ。ちなみに何を血迷ったのか中学までやってた陸上をやめ、高校では茶道部に入るといふ暴挙を犯している。

「あのお、そのニックネームやめない？もう少しましなのがあるだろ」

「いいの。呼びやすければそれで」

「だから、康太こうただからこーちゃんって何のひねりもないじゃん」

とか話しながら歩いてみると、一人の女の子と階段ですれ違った。小さい身体に膝ぐらいまであるかないかくらいの長い青髪。後姿しか見れなかったが、俺は少しその女の子が気になった。とそこへ俺が立ち止まっている間に少し前へ行っていた智絵から声がかけられた。

「どっしたの？こーちゃん」

「ん、なんでもない。さあ帰るぞ。早く帰らないと暗くなるしな」

「そうだねって待ってよー。こーちゃん」

俺はこの山奥ですこし開けただけの土地に存在し、まだ入学してから一ヶ月位しか経っていないこの私立英泉学園えいせんで、この世に存在し得ないものと遭遇することになるとは思いもしなかった。

俺の一日は同じ家に住むとある凶暴な中学生の目覚ましによって目が覚める。

「兄さん。朝だよー。おっはよー」

そう朝から元気なのはこの家に一人しかいない。愛すべきかどうかはわからないが、長い黒髪をツインテールに纏めた妹千秋ちあきだ。現在は、兄の体の上に見事なダイブを決めたところだ。

「痛ってー。お前はもう少しましな起こし方ができないのかよ」

「だって兄さん、普通に起こしても起きないでしょ？ だったら実力行使するのが一番早いんだもん。そんなことより、朝ごはんできてるから早く着替えて降りてきてね。智絵さんも待ってるから」

とだけ言い残して嵐のような妹は去っていった。

少しして朝食を食べ終え、じゃあ私は部活の朝練があるからと言って先に行った妹の代わりに食器を片付け（ちなみに妹は陸上部だ）、いつもどおり智絵と通学路を歩いていた。

「こーちゃん、今日私部活ないんだけど…帰りにどこか行かない？」
「
とふと昨日の女の子のことを思い出した。もしかしたら教室のある四階にいればまた会えるかもしれないと思った。」

「こーちゃん？ 聞いてた？もしかして聞いてなかったとか…」

「ん、ああ聞いてたよ。悪いな智絵。今日も日直の仕事があるから先に帰っててくれないか？」

「ふうん。まあ日直じゃあ仕方がないよね。今度またどこかで埋め合わせしてよね」

「ああ。また機会があればな」

そんなこんなで学校へついた俺たちは四階でA組の智絵は左へ、
B組の俺は右へ分かれた。

非日常との狭間

智絵と別れてから少しして、俺は一年B組の中に入った。入学して一ヶ月くらいだともっと静かでもいいもののだが、このクラスは賑やかだ…というより五月蠅い。まあ中学から知ってるやつらが多く固まるところなるのかもしれない。こんなことを考えながら自分の席に着くと、すかさず俺の前の席に座っているやつが声をかけた。

「よう。なんか元気ねえなあ。そんなに彼女と違う教室なのがいやなのか？」

「違うから。朝は苦手なんだよ。ていうかお前は俺があいつと付き合っていないことくらい知ってたんだろ」

と朝からちよっかいをかけてくる前の席のやつ。名前は武田秀人たけだひでと。中学からの知り合いだ。身長が高く、バスケットに入っている。面白いやつなんだが…若干ウザい。なぜ智絵と付き合っているなどとかかわれなくちゃならないのかわからんと秀人と話していると

「お前たちはなぜいつもそんなに五月蠅いのだ」

と横から落ち着いた声が聞こえてきた。声の主は、このクラスの委員長四宮詩織しおしおだ。入学初日のホームルームで誰もやらないのならと委員長に立候補した変わり者。黒い髪を三つ編みにして黒縁メガネといういかにもなスタイルの女子。

「委員長よ。五月蠅いのは秀人だけだ。俺まで巻き込むな。それにクラス中が五月蠅いんだからいいだろ？」

とこっちはこっちで言い争いをしていると、席に着けといいながら入ってきた担任によって一時休戦となった。

そして、休み時間になるたびに激しさをまし最終的にクラス中を巻き込んで、一人の早退者を出すにいたる戦いとなった昼休みも終わり（思い出したくはないが、どこかで語ることもあるだろう）、現在は六時間目、数学の授業が終わりホームルームを残すのみとなった。

「なあ康太、放課後どっか行かね？どうせ暇なんだから。彼女は部活だし」

「だから彼女じゃねえっていつてんだろ。ただの幼馴染。今日は日直だから無理だな。ほら先生来たぞ」

前では担任教師がホームルームをはじめようとしていた。だが、そのホームルームは一向に始まらなかった。というより、俺以外の人の動きが止まり周りの景色が赤一色で染まっていた。

「なっ。なにが起こってるんだ？」

「ほう。私の境界のなかで動けるやつがいるとはな。しかもそれが普通の人間とは」

俺は本能的に声のしたほうへ振り向いた。そこには小さい女の子がいた。高校生と違っていえなくもない身長に膝くらいまであろうかという長い青髪。勝気な釣り目。

「もしかして…あのときの」

そう昨日の放課後、階段の踊り場ですれ違った女の子とそっくりだった。

「お前はあの時の…そうか。あのときの違和感はお前のせいだったのか。だがまあ関係ないか。その人間よ、最後にひとつ教えてやるう。私は…吸血鬼だ」

そう目の前の女の子がいい終わるやいなや俺は動けなくなった。

「その絶望に染まった表情。なんともお前は食しがいがありそうだなあにすぐに終わる」

いつの間にか俺の前に来ていた少女がそう言って、吸血鬼のシンボルともいえる鋭くとがった歯で俺の首筋に噛み付こうとして…轟音とともにいきなり壁がぶち抜かれた。

「くっ。よりもよって食事時を邪魔するとは。いい度胸をしておく」

「あら、お食事中というよりお食事前ですわね」

「ふん、まあよい。今日のところはこれでさるとしよう。ひとつ発見もできたのでな」

と少女が目の前から消えた。そして今までピクリとも動かさなかった身体が動かせるようになった。そして、煙と瓦礫の中から長い髪となにかの戦闘服っぽいものを身に纏った一人の女性が姿を現した。

「委員長！？ どうしてここに。早退したはずじゃあ……」

隣の教室から壁をぶち抜いて現れた人物。それはこのクラスの委員長、四宮詩織だった。

魅入られるもの

「委員長か？」

俺は確認の意味をこめてそう聞いた。なぜなら、いつもとは違う委員長だったからだ。そもそも、三つ編みじゃなく、黒縁メガネをかけていない委員長など委員長ではないからな。普段から俺の目が狂っているのか、それともこの普通じゃありえない状況を見せている幻覚なのか果たしてわからないが…っ！か戦闘服に見えたものは実はチャイナドレスだったし。

「っていかどうして幻覚や目が狂っているという方向性で考えてるのよ。現実だと認識しなさい」

ついには地の文にまで入ってきやがった。いよいよ現実じゃないな…とそこまで考えたところで激しい衝撃と鈍い痛みが俺の身体を襲った。

「だからっ、現実から逃げるなって言ってるのよ」

と人をなんら躊躇^{ちゆうちゆう}することなく吹き飛ばした四宮が言う。ただ手加減はしてみたみたいで（というより手加減なしだったら俺の身体が粉々だが）教卓に背中を思いっきり打っただけですんだ。

「いやいや、現実から逃げたくもなるから。だって吸血鬼だとか名乗り目の前で姿を消す少女とか、素手で壁をぶち抜くやつとか、三つ編みじゃなく黒縁メガネすらかけていない委員長とか、チャイナドレスを着ると意外とスタイルがいい件とか…これをどう現実だと信じると？」

「最後の三つは明らかにおかしいでしょっ!! まあいいわ説明してあげる。わざわざ説明してあげるんだから感謝しなさいよね」

「……………」

「なにかツッコみなさいよっ! 調子が狂っじゃない」

「現実逃避するほど混乱してる奴にツッコミと求めるな。というか説明してくれ。どうして俺はこんな不可解な現象に巻き込まれていくかを」

「やっと現実を認識したのね。まあ説明するも何もないわよ? だってあの少女は『存在してはいけないもの』で、私は『それを排除するもの』だから。ここまでは大丈夫?」

「大丈夫なわけあるかっ! よりわからなくなったわ! だいたいなんだよ『存在してはいけないもの』って」

「簡単よ。存在するだけで人に不幸を与えるものなんだから。もっとわかりやすく言えば『おばけ』ね」

「? どうしておばけなんだ?」

「人に『怖い』というマイナスの感情を与えるから。これだけならいいけど、人に影響を与えるものもあるわ。たとえば『金縛り』とかね。最悪『死ぬ』なんていうのもアリだから」

「なるほど。じゃあ、この赤いのはなんだ? それに奴らはどうしてここに現れた?」

「これは結界ね。ありきたりだけど、奴らが現れるときにできるものよ。さっきの吸血鬼ほどになると自分で作ってしまうわ。普通は動けないものなんだけど。それと、よく現れるのは墓地とかね。時間帯的に言つと『丑三つ時』とか『逢魔が刻』とかよ。まあ夕方の学校に現れることは珍しいからこれから調べてみるわ」

そんな話をしていると、結界が解けたのか周りが暗くなっていた。

「さてと、結界も解けたみたいだし私は帰るわ。まあまた学校以外で会うこともあるでしょう。それまであまり余計な詮索はしないほうがいいわよ。じゃあね」

とだけ言い残して彼女は去っていった。そして、誰もいないであろう学校の教室に一人取り残された俺は…

「どうして三つ編みじゃなかったのかとか、なぜチャイナドレスを着ているのかとか聞きそびれた！！」

と全力で叫ぶのだった。

その夜、とある会議室に十数名の男女が集合していた。そしてモニターで流れていたものは、今日とある学園で起こった一幕だった。すべて見終わつたとき、円卓の中心に座っている男が言った。

「ほう。よく取れているではないか。だが結界のなかで動けるとは彼も何かしらの能力持ちか？」

「いえ、まだ調査中ですのでなんともいえませんが、例外に
例外が重なる時は嫌なことが起こりますから」

そう男の問いに答えたのは、とある女だった。

魅入られるもの(後書き)

出会いと出会いと…（前書き）

今回から前書きと後書きを書いていきたいと思えます。

いろいろとセンスは皆無ですので、読みたくないという方がいたら飛ばして読んでください。

出会いと出会いと…

俺はひとしきり叫んだ後、学校を出た。まあ全力で叫んだから警備員とか来そうだったし、あいにく学校で生活をするなんていう奇抜な趣味は持ち合わせていない。時間も時間だから家に帰りたいたいな。

「つーか妹あいつにどう説明するかなあ…」

と俺はそんなに長くない帰り道の途中、妹への言い訳…もといいかにして説得するかということだけを考えていた。

「はあ…結局まとまらなかった。なんかドアの向こうから殺気も感じるし…」

妹に（主に生命の危険という意味で）抹殺される。完全にドアを開けないで回れ右をしたいところだが、家はここにしかないのは俺は意を決してドアを開けることにした。

「ただい…ま？ って何だよこれ！？」

俺は事態が飲み込めずにいた。なぜなら…

さっきまで殺気を放っていたであろう妹が得体の知れない少女に馬乗りになされていた。つーかその少女は学校で俺に吸血鬼だつとか名乗ってきたやつだった！ つーかなにやら首筋に噛み付こうとして固まってるし。

「……………」

とりあえずまずは無言でドアを閉めました。なんだどうしたらいいんだ？ これは委員長を呼ぶべきなのか？ つーか妹が噛まれそうだったし。ん、噛まれそう？

「って確か吸血鬼だったよなあ！」

と思い出してドアを思いっきり開けた。すると…

「おかえり、兄さん。あとで『おはなし』があるから」

今度は吸血鬼？ の少女の上に馬乗りになり、首だけをこっちに向けて笑顔で恐ろしいことを言う妹がいました。

「……………」

「あ、ちよつ兄さーんどうして無言でドアを閉めるのかな？ かなつ??？」

…妹が病んだ。完璧にあれはヤンデレっていう種類だよね。普段からそんな気はしていたけどあそこまでひどくはなかったと思ったけど。社会的に殺されるんじゃないかと、命を奪われそうだよ。なんかもつさっきの出来事とか正直どうでもいいよね。だって命の危険だし、話終わっちゃうし。

とにかく家の中に入らないことにはどうにもならなさそうな予感がするので、とりあえずドアを開けて家の中に入った。

「兄さん、おかえりだねっ！ とりあえず…邪魔な存在は消しとい
たから大丈夫だよ？ ゆっくり『おはなし』しよっ？」

「お前が大丈夫じゃねえ！ とりあえず妹よ、俺もお前に『おはな
し』したいことがたくさんあるんだが。お前のおはなしはあとで聞
いてやるからまずはその手に持っている危ないものを置いてくれ？」

「

「えー。しょうがないなあ。今回だけだからね？」

とか言いながら妹は危ないものを床に置いた。

ふう、何とか命は守ったぞ。とにかく妹といるいろ『おはなし』
しなきゃな」…

「また現れたの？ 今日はやたらと多いわね。なにかよくないこと
でも起こるのかしら？」

「といいながら家の壁を平然と破壊して現れた人物は…委員長だっ
た。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6006x/>

吸血鬼の作法

2011年11月8日03時11分発行